



副会長挨拶

転換期にあつての思い

公益社団法人 全国上下水道コンサルタント協会 副会長 間山一典
(株式会社 日水コン/代表取締役社長)



新年あけましておめでとうございます。平成から令和に年号が変わって、最初のお正月になります。

昨年6月の総会で新たに副会長に就任いたしました(株)日水コン 間山一典です。はなはだ微力ではありますが、水コンサルタントの社会的地位の向上、会員各社の一層の発展に尽力したいと思っています。どうかよろしく願い申し上げます。

今回、執筆の機会をいただいたので、自己紹介を兼ねて平成という時代を振り返り、そして、これからの時代への思いを綴ってみました。

○平成という時代（思い出と印象に残る仕事）

昨年、社長に就任し、新聞等のインタビューで、「平成という時代はどうでした？」といった質問を何度か聞かれました。令和の時代になって、平成という時代を振り返ると、長いようで短い、そして、日々の変化は小さいが、水道界や会社も大きく変わったと思います。受注減もあって、苦しい時期もありましたが、よくぞ乗り切ったと思います。

平成が始まったのはちょうど30歳くらいのとき、技術士をとってやっと1人前かなという時期です。水道では、「質的向上」という言葉が使われだしたときでした。阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件もあって、日本の安全神話が崩壊したというか、リスクを意識せざるを得ない時代になったと思います。阪神淡路大震災を契機に、水道の耐震化計画策定指針ができました。それまで、コンサルタントの仕事は設計が中心だったのですが、計画に目が向きだした時期だったと思います。

平成11年に水道事業の費用対効果分析マニュアルを最初につくることになった仕事をしましたが、水道事業での事例は少ないし、そもそも事業の効果ってなんだろうと苦労した思い出があります。事業に対する透明性や客観性、説明責任が求められだした時期と思います。

平成16年に水道ビジョンが厚生労働省から公表されました。更新需要を試算して、破綻のシナリオとか破綻グラフと呼ばれました。それまでの安全、安定に加えて、事業の継続性とか、中長期の視点が出てきたと思います。

水道ビジョンの支援業務は、水コン協の受託業務とし

て、各社で分担しました。ビジョンを初めて作るということで、厚生労働省に何回も打合せに行った苦労を思い出します。

平成21年にアセットマネジメントの手引きを書きました。たぶん、自分でプロジェクトを持った最後の仕事だったと思います。当時は、アセットマネジメントって何？という雰囲気でしたが、いまでは事業継続のツールとして定着したと思います。

東日本大震災もありました。想定外は通用しない時代になったと思いました。その後も、熊本地震、北海道胆振東部地震と大きな地震が頻発しています。昔は、大規模地震は10年に1回と言われていましたが、いまは5年に1回くらいの頻度になっています。地震以外にも、昨年は台風などで大きな水害も発生していますから、リスクと向き合う姿勢を変えるべき時期に来たのだと思います。

○これからの時代

(拡張から更新、そして再編成・再構築)

日本の水道事業、下水道事業もそうですが、人口や需要水量のピークをよくぞ乗り切ったと思います。若い時には、用水供給事業の創設とか渇水対策にも関わりましたが、拡張の時代は、量の確保やスピードが優先されて、質やエネルギーといった側面が後回しにされた時代だったかもしれません。これからは、それを本来あるべき姿に再編成・再構築していく時代だと思っています。技術者にとっては、やりがいのある時代のはずです。

この先人口減少で料金収入が減るし、設計などの従来型の仕事は減るでしょう。ですが、事業環境が厳しくなるほど、知恵が必要とされ、知恵が評価される時代、社内ではそう言っています。

(地域との関わり)

昨年公表された第二期中期行動計画(2019-2021)では、主要行動1として、「水システムを通じて地域・都市を豊かに」が掲げられています。地域によりそって水インフラを守っていく、そんな使命感を読み取れます。

地域における最適化とは、指針とか基準、前例にとら

われない柔軟な発想が必要かもしれません。性能設計は先のこともありませんが、コンサルタントそれぞれが、個を磨く、高みを目指す、そんな志が必要にも思えます。

やりがいのある時代である反面、技術の競争の時代と言えるかもしれません。

(事業領域の拡大)

改正水道法が施行されました。広域化や官民連携(PPP)の動きは加速すると思います。個別施設の設計から、事業への関りへと領域は広がっていくでしょう。

コンサルタントの語源は、「座して議論し共感を得ること」と聞いたことがあります。地域における最適化を考え、関係者の合意形成を図ること、時間がかかり、粘りと根性が必要かもしれません。ですが、やりがい、達成感のある仕事のはずです。

下水道では、エネルギーや農業との関係も出てきます。規模の経済だけでなく、範囲の経済にも目を向けなければと思います。

拡張の時代は、無いもの、不足しているものを作る、事業の意味がわかりやすかったと思います。これからは、あるもの、既存ストックをどう活用していくかが問われます。縦割り行政という言葉もありますが、それに横串を指すのもコンサルタントの役割ではないかと思いません。

地域によりそって、事業を企画・立案する、ある意味わくわくするような仕事で、若い人たちの可能性をうらやましく感じます。

○水コンサルタント(特に若い人)への期待

(変化への適応)

これから日本の社会システムは変化していくはずで、我々もそれに適応していかなければなりません。そのとき、「これまで」と「これから」を分けて考えるべきと思っています。

ある本で、これからの社会の変化を、「ジグソーパズル型」から「レゴブロック型」への転換と表現していました。あらかじめ答えが決まっていて、それへ最短距離で到達するのがジグソーパズル型で、正解がなく、何を作るのかが問われるのがレゴブロック型、という意味です。

これまでの常識を、一度立ち止まって、本当にそうか

と考えるべきかもしれません。情報収集能力だけでなく、発想力、説得力のある人材が求められるのではないかと思います。地域との関りもそうですが、限られた資源をどう組み合わせるのか、前例にとられない発想が必要でしょう。

(広報・CSR)

昨年の下水道展で、水コン協のブースが優秀賞(3小間以下)をいただきました。誇らしいことですし、関係者のご苦勞に感謝申し上げます。コンサルタントという職業が社会に認められつつあるのかな、などと勝手に考えて、勝手にうれしく思いました。

ながらく、公正・中立の立場をとってきたせいも、当社もそうですが、外部への情報発信が不足しがちで、黒子に徹しすぎでは?と感じることがあります。

いまSDGs経営の必要性が言われています。企業の存在意義を問うものもありますが、水コンサルタントの企業活動そのものがSDGsであるといつてよいと思います。業界の発展のためには、優秀な人材確保が不可欠ですが、この業界を広く知ってほしいと思います。

若い人も会社の外に出て、自ら情報発信してほしい、外の世界を経験してほしいと思います。

SDGs: 持続可能な開発目標

Sustainable Development Goals

(公益性)

水コン協は、2018年4月に公益社団法人となりました。職業としての公益性が認められたものです。公(おおやけ)の担い手は、けっして官だけではなく、官と民の両方のはずです。双方が役割分担、協力して、住民へ働きかけるものです。

水コンサルタントの仕事は、憲法第25条にある生存権を保障するもの、この職業に誇りを持ってほしい。ただし、そのためには信用される存在でなければなりません。中期行動計画にも、「リスペクトを受ける存在に」とあります。コンプライアンスは当然ですが、日々の言動や人との接し方など、襟を正さなければと自戒しています。

コンサルタントの最大の経営資源は人です。業界の発展が、優秀な人材の確保につながり、公益に資するサービスを提供する、そんな好循環を実現できるよう努力したいと思います。これからもよろしくお願ひします。